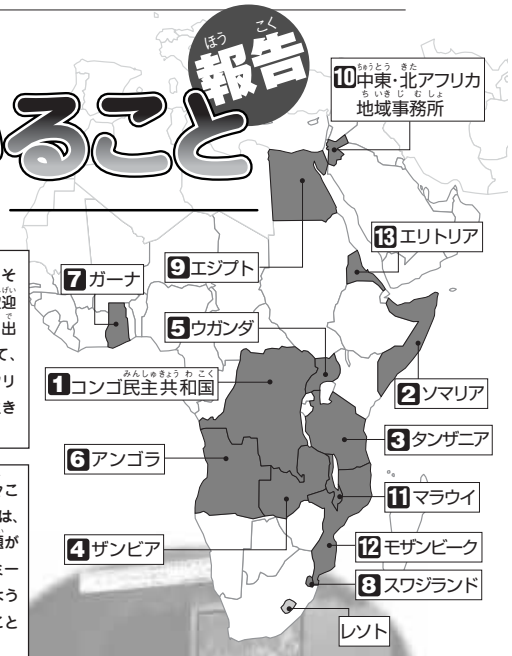
©UNICEF/Angola

ユニセフ・アフリカ・ミーティング報告

今、アフリカで起きていること

ニュースからは見えないアフリカを感じた日



9月29日にひらかれたユニセフ・アフリカ・ミーティングには、アフリカで働く日本人のユニセフのスタッフが13人も集まりました。日本ユニセフ協会大使のアグネス・チャンさんが司会をし、アフリカ13カ国のようすが次から次へと話されました。会場には、およそ1,500人が集まりました。アフリカの問題に関心が集まりはじめているようです。

©UNICEF/Angola

アグネス・チャンさんからのメッセージ

1985年にエチオピアで見たことを一生忘れられません。当時、干ばつと内戦で人々は飢え、骨と皮しかない人がさまよっていました。食料の配給にきたトラックから落ちた麦をひろいあつめて、砂でも麦でもかまわずにじゃりじゃり食べる子どもたち。その子どもたちは、踊って私を歓迎してくれました。子どもたちと出会い、目の前で人が亡くなって、私の人生も変わりました。アフリカは遠いけれど、私たちと同じ一生懸命生きている人がいることを実感しました。

ユニセフ事務局長のキャロル・ベラミーさんも飛び入りであいさつ！

アフリカの子どもたちがきびしい生活をしていることは本当です。子どもが亡くなる割合がとても高く、HIV/エイズやマラリアの問題も大きいです。特に女の子たちが学校に行けない。ここにいるスタッフは日々こうした問題をとたたかっています。彼らは、アフリカにはどのような可能性や問題があるのかを話してくれるでしょう。ミーティングの後、みなさんも私と同じように彼らのことを誇りに思ってくれることと思います。

スタッフからのレポート

1 釜土　真帆子さん（ユニセフ・コンゴ民主共和国事務所）

何もない国にも、お母さんのお乳はある！

コンゴ民主共和国は、戦争があり、貧しい国です。その中で、たとえば、子どもの栄養をどうよくしていくか。ユニセフは、生まれてから6ヵ月は母乳だけで育てるようにすすめています。村に行くと、母乳育児を知っているお母さんの赤ちゃんはまるまると健康です。コンゴは何もない国ですが、母乳で子どもを健康に育てることができるのです。6ヵ月後の赤ちゃんには、病気とたたかう力を強めるためにビタミンAを与えます。遠いところまで視察に行きましたが、ちゃんとそのビタミンは届いています。子どもたちは、口に落としてもらうビタミンを待ち遠しくしていて、遊びのようにして受け入れています。ユニセフは、ビタミンなどを飛行機、車、バイクを使って1,100万人の子どもに届けているのです。

2 西垣　洋子さん（ユニセフ・ソマリア事務所）

平和をつくるには、子どもが平和を知ることから

ソマリアは10年以上内戦が続く国です。15、16歳の少年が銃を持って地域を守っているのを見たとき、「本当に平和が必要だ」と感じました。平和作りのためには、平和を大切に思い、互いのちがいを大事にできる人が育つことが大切です。2年前、ユニセフが率先して20年ぶりに小学校の教科書をつくりなおしました。教科書には、たとえば、都市や農村、遊牧、漁業などいろいろな生活があることを描きました。学校に通えなかった若者のためのプログラムでは、ケンカではなく他の方法で解決する力をつけられるようにしています。先生が偏見を持っていたり、力で子どもを従わせようとすると、子どももそれをまねするので、先生のトレーニングもします。将来、ソマリアが平和になって、「今の活動が実を結んだ」と思える日を楽しみに活動しています。

3 秋山　直子さん（ユニセフ・タンザニア事務所）

本国の戦争にまきこまれる難民の子どもたち

タンザニアは、東アフリカでただひとつ戦争のない国ですが、戦争をしている国にかこまれていて、長い間、多くの難民（戦争や災害から国をこえて逃げてきた人びと）を受け入れています。今もブルンジやコンゴ民主共和国から50万人（うち20万人は子ども）の難民が逃げてきています。去年の末、ブルンジ難民の子どもたちが学校をやめ、キャンプを出ているという情報がありました。調べると、出席簿では学校に来ているはずの子ども数百人がいないことがわかりました。そのころブルンジでは、政府と政府に反対する軍が和平協定（戦争を終えるための約束）を結ぶ準備を進めていましたが、その前に自分たちの領土を増やそうとして戦闘がはげしくなり、子どもたちが兵士として集められていたのです。これまでは、学校に通えない子どもが兵士にさせられることが知られていましたが、今回はキャンプの小学校や中学校に通っていた子どもまでもが、本国に帰って戦争に参加していました。

秋山さんへ　Q 子どもが兵士として本国に帰るのは子どもの意志ですか？

A. 子どもたちは「国が君たちを必要としている」と言われてしまうと、納得してしまいます。子どもたちは、たとえ幼いときのことでも、家族が殺されているのを見ていたりして、戦争が記憶に残っています。12歳くらいになって、自分は子どもではないと感じ、自分を必要としていると思うと、（戦争に）行ってしまうのです。一見、子どもの意志で行っているようでも、結局はおとなに利用されているので、ユニセフは、子どもの意志だからほうっておいてよいとは考えません。

©UNICEF/Zambia

4 西本　伴子さん（ユニセフ・ザンビア事務所　副代表）

魅力あふれるアフリカ・問題をかかえるアフリカ

ムリブォワンジ！ザンビアの部落語キリヤンジャで「こんにちは」です。アフリカには自然の美しさ、多彩な文化があり、限りなくカラフルな大陸です。近代化が進んでいて、アフリカの都市は日本と変わりません。天然資源も豊かで、ダイヤモンド、金など多くのものがとれます。しかし、問題があるのも事実です。ユニセフの活動用のお金の半分はアフリカにつぎこまれていて、ユニセフのスタッフは10人いれば4人が、アフリカで働いています。特にHIV/エイズは深刻です。1980年代中ごろからエイズで亡くなった人は、戦争で亡くなった人の10倍です。亡くなる人は、父や母であり、先生、農民、エンジニア、医者、看護師でもあります。こうした人がいなくなり、あらゆるところで危機が起きているのです。アフリカの伝統では、孤児は親せきが育てますが、病気にうつりたくないなどと差別を受け、親せきを転々とするうちに、ストリートチルドレンになったりしてしまいます。

西本さんへ　Q 日本がアフリカから学ぶことは何でしょう？

A. お母さんがエイズで亡くなり、いろいろな家庭をたらいまわしにされて、孤児院に入ったある女の子がいます。彼女は、ユニセフの活動で体験を話してくれるようになりました。その子が話すとてもとても説得力があります。でも、話し終わるといつもワッと泣いてしまうので、「かわいそうで仕方ないからもういいよ」と言うと、「私が話して、お母さんみたいに死ぬ人がいなくなるなら、私のような子どもがへるなら、もっと話す」と言うのです。日本にはいっぱいモノがあるのに、人と分け合うとか人を助けるということが忘れられています。アフリカでは、悲しみをいっぱい知った人、何もない人びとが、たった11歳の子どもですけれど、それでもほかの人を助けたいと言うのです。

※エイズは後天性免疫不全症候群という病気のことで、HIVはその病気をひきおこすウィルスです。まだ治す方法はありません。くわしくはユニセフ子どもネットニュースNo.2を読んでね。

5 平良　佳誉子さん（ユニセフ・ウガンダ事務所）

地域がいっしょになって子どもを育てるしくみづくり

ウガンダは、お金を注ぎこめばきちんと成果を出す優等生の国といわれています。たとえば、1992年のHIV感染の割合は30パーセントでしたが、今では6.5パーセントにまで下がっています。でも、ある村で、ひとりの女性が言いました。「データが何？私の子どもは感染して亡くなりました。私には100パーセントいじょうの悲しみです」と。この言葉を胸にきざんでいます。

今、親、村、政府と協力して、子どもの健康や栄養を守り、教育を受けられる総合センターをコミュニティーにつくるプログラムを進めています。トレーニングを受けたスタッフが、子育てにかんする住民の考えや習慣などの良い面を調査し、住民の考えを取り入れながらセンターを作ります。センターで実現したことのひとつに遊びの時間があります。親たちが、家の手伝いで遊びの時間がない女の子にも、男の子と同じように遊びの時間をつくろうと考えたのです。このような取り組みが広がっています。

※写真©日本ユニセフ協会/Shindo

スタッフからのレポート

6

名取　郁子さん（ユニセフ･アンゴラ事務所）

世界で3番目に子どもが亡くなる国でのユニセフの活動

ユニセフは、アンゴラで、戦争で逃げまどっていた子どもたちを普通の生活にもどすために、“バック・トゥ・スクール（学校にもどろう）キャンペーン”をおこなっています。ユニセフが教材を届け、教育省が先生を増やして各校に送り、25万人の子どもたちが学校に通えるようになりました。9歳になって1年生になれたジョゼベント君は、内戦中ゲリラに村が攻撃されて、家族とはぐれを追われ、2歳の弟を殺された経験があります。学校に行けなかったおとなも勝手にいすを持ってきて、屋根しかない学校で一緒に授業を聞いていたりしますが、それもいいことです。また、予防接種も大きな事業です。ワクチンは暑さに弱く、冷凍ボックスに入れて運びます。地雷があったり、道路がなかったり、ワクチンを運ぶのは大変ですが、子どもたちもえっさほいさと冷凍ボックスをかついでいます。はしかの予防接種キャンペーンでは、700万人の子どもが予防接種を受けました。

7

大窪　さおりさん（ユニセフ･ガーナ事務所）

赤ちゃんや幼い子どもの環境を守る

ガーナでの問題のひとつは、赤ちゃんや幼い子どもの環境の厳しさです。たとえば、市場で働く女性たちが子どもをあずけている託児所は、衛生の状態も悪く、子どもたちの顔にハエがたかっています。栄養不良のためにお腹がふくらみ、細いうでをしている子どももいました。そんな中、世話をしている人たちが、ユニセフなどに働きかけてひとつのプロジェクトがはじまりました。最初、選ばれた託児所に、バケツ、タオル、せっけんなどが届けられ、子どもの世話をする人や母親たちに衛生についてのワークショップがひかられるようになりました。特に評判がいいのが、月に一度の子どもの権利について学ぶ集会です。おしばいで、出生登録の大切さなどのメッセージを伝えています。だんだん、子どもたちの環境はよくなって、この前、同じ託児所を訪問したときには、子どもたちは歌を歌っていました。

8

大井　佳子さん（ユニセフ･スワジランド事務所）

エイズで親を失った孤児を守る努力

スワジランドでは3人にひとりがHIVに感染していて、職場でも毎週スタッフのだれかの親せきのお葬式があります。親を失った子どもだけの家族もたくさん見かけます。15歳の女の子セボンヌは、メイドとして月に1,000円の給料で働き、6人の子どもの面倒を見ています。給料は食べ物でなくなってしまい、学校には行けません。ユニセフはケアセンターを作ったり、空き地を畑にしてそこから食べ物をとれるようにしたりしています。孤児は性的な被害にあうこともあります。ある時、ひとりの女性が、夫が孤児としてむかえた女の子に乱暴していると話してきました。でも、それを警察に言うと、夫が連れていかれて、自分たちは生きていけないと言います。スワジランドでは女性は資産を持てないという法律があり、夫がいなくなると女性は生活できないのです。そのときは、村が家族を支えるという話し合いをして警察に届け、その夫はつかまりました。

9

大澤　祐子さん（ユニセフ･エジプト事務所）

古代からの悪習“女性性器切除”とたたかう

エジプトはピラミッドなどのイメージが強いと思いますが、今回はファラオの時代からの問題である“FGM”（女性の性器を切りとる風習。手術のせいで命を失ったり、一生苦しむ女性が多い）を紹介します。アフリカの28カ国以上で、毎年2,000万人が受けていると言われるFGMは、女の子の性的な純潔を守るためのものと言われ、エジプトではほとんどの女性がFGMを受けています。ユニセフは、これをなくす活動に取り組んでいて、エジプトでは若者による反対活動もおこなわれています。15歳のサルマちゃんは11歳のときに、お母さんとおばあさんに体を押さえられてFGMを受けました。誤解しないでほしいのは、それは、FGMをしないと結婚できないという親の愛情からなのです。サルマちゃんも女に生まれた義務として苦しみを乗りこえようとしていましたが、妹のアマルちゃんがFGMのために12歳で亡くなったことから、この伝統に疑問を持ち、今では、反対活動に活躍しています。

10

兼光　由美子さん（ユニセフ･中東/北アフリカ地域事務所）

北アフリカの子どもたちの課題

私の事務所でとりまとめている北アフリカの7カ国は、ほとんどがイスラム教の国で、アラビア語が公用語です。中近東や北アフリカ地域に紛争が蔓延しているのは事実です。若い人に将来の夢を聞くと、欧米に移住したいと答えます。海外への好奇心が強いというより、自分の国に仕事がないという理由からです。若い人が自分の国や将来に希望を持てないことがこの地域の一番の問題ではないかと思います。子どもたちの社会参加が少ないことも共通の課題です。クラブ活動やスポーツにもあまり参加しません。おとなも子どもが社会に参加することをあまり大切に思わず、学校はつめこみ式です。男女を分ける社会で、女性が教育を受けても仕事につくチャンスはあまりありません。でも、最近はエイズや女性性器切除問題（FGM）も語られるようになってきました。社会がゆっくり変化していると感じます。

11

富田　真紀さん（ユニセフ･マラウイ事務所）

ひとりでも多くの子どもにきちんとした学校を！

マラウイでは、1988年に48歳だった平均寿命が、2000年には39歳に下がり、毎日139人の人が亡くっています。孤児は47万人もいます。これはすべてHIV/エイズのためです。

1994年に小学校が無料になり、小学生が190万人から300万人近くに増えました。しかし、国のお金が足りていません。仮の教室では、わらぶき屋根に木の柱だけが立っていて、生徒が地べたに座っています。雨が教室の中まで入ってくるので、とても勉強できるような環境とは思えません。でも、子どもたちに「学校は好き？」と聞くと、みんな目をキラキラさせて「勉強するのは楽しい」「もっと勉強したい」と言います。ユニセフが届けた教材の入ったかばんを大事そうにほこらしげに持っている子どもたちを見ていると、あきらめずにやっていかなければ、と思います。

12

斎藤　鈴恵さん（ユニセフ･モザンビーク事務所）

内臓まで…。ひどい虐待の現実

モザンビークでも孤児が性的搾取の犠牲になる問題が起こっています。4歳のエルマナちゃん（仮名）は、おじいさん、おばあさん、お兄さん、お姉さんと暮らしていました。両親は南アフリカに出かせぎに行ったまま行方不明で、おじいさんのほんの少しの収入で暮らしていました。ある晩、ひとりの男が忍びこんできて、エルマナちゃんをさらいました。村はずれの小屋に連れこんで逃げようとするエルマナちゃんを何度も乱暴しました。男は、気を失ったエルマナちゃんの性器を切りひらいて内臓を取ろうとしましたが、気づいた村人がエルマナちゃんを救い出しました。1年前にも同じような事件があり、その時は、内臓も取られてしまった子どもは亡くなりました。内臓は、先進国の臓器移植のために売買されていると考えられています。犯人はつかまっていません。こんな悲惨な話を通して、アフリカの問題解決をどうして急がなければならないかをわかってほしいと思います。

13

菊川　穣さん（ユニセフ･エリトリア事務所）

“子ども参加”が明るい未来へのきざし

大変な状況にあるアフリカでも、日本でもまだないような前向きな活動がある例を紹介します。この前まで私が働いていたレソトでは、子どもの性的虐待を防ぐための法律に、性的搾取の問題がふくまれていませんでした。政府は法律をあらためる作業を進めていて、この作業に、子どもたちが積極的に関わっているのです。子どもたちは、委員会で意見を言うだけでなく、村へ行って劇をして、今の法律ではこういう犯罪が起こったときに子どもたちを守れない、なぜ変えなければならないかを説明します。すると、それを見た村人たちがいろんな意見を言い、今度は、それを子どもたちが委員会に伝えます。これはすごい活動です。

また、エリトリアは、エチオピアから独立する前に30年戦争をしていて、最近も国境紛争が終わらず、国じゅうに地雷があります。この問題について、子どもたちが積極的に地雷の危険を知らせるキャンペーンをおこなったという例もあります。

コラム　Column

アグネスさん、サンコンさん、ゾマホンさんがアフリカへの支援をよびかけ

9月22日、品川駅前ふれあい広場に、アフリカの民族衣装を着たアグネスさんと、テレビなどで活躍しているギニア出身のサンコンさん、ベニン出身のゾマホンさんが集まりました。アフリカン・バンドの演奏もあり、多くの人が集まる中、3人は、「アフリカの問題を解決しなければ、世界の問題は解決しない」とうったえました。アフリカ各国に届けられている教材セットなども展示され、1日ユニセフ教室が出現しました。

©日本ユニセフ協会/Shindo

感想　参加したネットワーカーから感想

わたしもアフリカミーティング行きました。厳しい現状だけでなく、本当はアフリカの自然ってすごく素敵なんだよっておっしゃってた西本さんの話がとても印象的でした。

“なんなんだろう、この世界の格差は。豊かな人（国）はとことん豊かで、貧しい人（国）はとことん貧しい。”いつもそう思う。なんだか悲しくなりますね。どうしてこんなことが起こるのか、理由は何だと思いますか？たくさんの人が努力しているのになかなかその差が理められない理由はいったい何なのでしょうか。　（中津川　有紀　17歳）

最近、イラクなどが話題だったせいか、アフリカの人たちのことを忘れていました。でも、アフリカ・ミーティングでアフリカの状況のひどさを思い出しました。今、援助を受けている国ぐにがいろいろあるけれど、もっとアフリカに多くの助けが必要。そして、もっと多くの人に、アフリカの現状を知らせなければならないと思います。アフリカの中の、あるひとつの国で起きている問題は、近隣の国へも難民などによって伝わってしまう。だから、アフリカ全体の平和を目指すことが大切ですね。たとえば植民地化した国がひいた現在の国境ではなく、民族の分布を考えた国境によって、国を作りなおすなど。お話の中で、自然は豊かなのに内戦続きで畑などが作れず、アフリカの人の平均寿命が短くなっている、ということが印象に残りました。　（今関　美都　13歳）